

丹波の若松で 春を迎えたい。

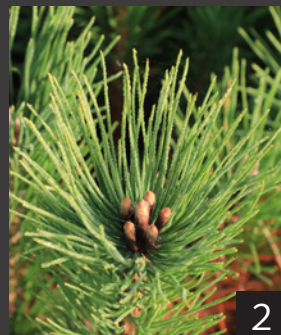
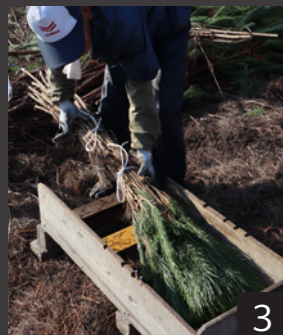
静かな朝に、朝露に光が反射してきらめく緑の葉。11月初旬の山南町坂尻集落は、正月の生け花や門松に使われる「若松」の収穫・出荷準備の最盛期を迎えていました。早朝から収穫された若松は、12月に東京から九州までの花市場に出荷され、正月の風景を彩りました。

若松は種をまいて1年で苗になり、苗を植えて3年目に、1.5メートルほどに育ったものを収穫します。収穫の後には不要な枝や葉を取り、傷や枯葉がないかを確認し、長さをそろえ、丁寧に箱詰めされます。みずみずしさを保つため、出荷までビニールハウスの中で水に漬けて保管します。

丹波市で若松の生産が始まったのは戦後のこと。昭和40年代後半から家庭などで新年に縁起の良い松を飾ることが恒例になり、それに伴って需要も増え、丹波市が愛媛・茨城に並ぶ若松の日本三大産地になりました。栽培の盛んな坂尻集落は石が多い土質で、米が作りにくいことから、花や薬草、松の栽培に力を入れたと言われています。

現在は、27軒の農家が約11.5ヘクタールの面積で栽培しています。今後、産地を守っていくための課題は、全国的に生産量が減っている「種」を確保すること。そのため、購入に頼らず、生産者自身で松ぼっくりから種を取る試みを始めています。正月には不老長寿の縁起物の「松」を飾るという、昔から受け継がれた伝統を残していきたいものです。





1_収穫時期には約1.5 mの高さになる 2_松の新芽 3_収穫した若松の長さをそろえる 4_成長する若松 5_収穫後の耕地で品質による仕分けを行う 6_正月には華やかに生けられる 7_今後の栽培にかかせない松の種を取る松ぼっくり 下段_出荷準備作業に精が出る坂尻集落のみなさん

